勿凝学問 154

この期に及んでも医療に無駄がある論の根強さの原因は？
国民会議医療介護福祉分科会に出席しているときのメモ

2008 年 5 月 23 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

社会保障国民会議の医療介護分科会に出席していると、調子の悪い車のハンドルのように、議論が医療に無駄がある論に自然にぐーんと曲がっていくのを感じる。なぜだろうか？

医療者は医療が大変だから財源がほしいという。
しかし医療者は、負担増は絶対に反対だという。

医療者の願いを叶えてあげるための手段を講じようとすれば、その手段に反対する。
こうした医療者を前にする政治家にとって最も都合の良い戦略は？

医療に無駄があると信じる有権者、医療不信を強くいだく有権者を育てることが最も効率的な最適戦略になるような気がする。

日本の医療史は、こうした経緯で形成されてきたのではないだろうか――などと、2 日前の 5 月 20 日に開催された社会保障国民会議の「医療介護分科会」に出席して、議論の流れを傍観しながら思う。その時、メモには「ダラダラとこのまま時間切れに持ち込まれるのか」と記す。

会議の最後に入ってきたプレスの前で、伊藤補佐官は、前回 5 月 16 日の親会議で首相が口にした言葉、医療介護の「大胆な効率化が必要」を大きな声で言っていた。中間報告がこの方向に進むとなれば、この内閣、支持率は一層落ちていって、秋の報告書までもたないことを実感する。

そして翌 21 日、「できることからやる」「小さな改善大きな満足」などとこじんまりとした「少子化・仕事と生活の調和分科会」では、オブザーバーだからといって遠慮をすることを止めた（いずれ公開される議事録参照）――ちなみに、わたくしの本籍は雇用年金分科会にあり、他の二つの分科会はオブザーバーとして出席中。発言は正規メンバーに優先順位がありオブザーバーは正規メンバーの発言がないときにというような暗黙のルールがいつのまにかあった。しかし 21 日には誰よりも早く、一番はじめに、「できることからやる」「小さな改善大きな満足」などではなく、もっと大胆なダイナミックな議論をという発言をする。さらに、為政者たる政治家は自らの保身のことをもっと考えてほしい。この会

議が今のままでは、為政者は為政者の地位を追われることになる、今は社会保障で国民に夢をあたえるのが重要だろうとも発言する。

　ところで、数日前に、道路特定財源の一般財源化がらみで、ある週刊誌から次のような問い合わせがきた。

> 弊誌では５年で１兆円という額があれば、叫ばれている医療費や社会保障費に優先して有効な使い道ができるのではと考え、「１兆円あれば～できる」という簡単な見立てを先生にしていただければと思っております。

返事は出さなかったけど、答えは瞬間的にできていた。

> そのお金は教育や環境に回しておけばよし。
> 医療は５年で１兆円ではどうにもならない。
> 医療は社会保険料と租税の引き上げで毎年７兆円ほどの財源を確保する。
> 国民に社会保険料・租税の負担増を訴える正当な理由が医療には十分にある。

　返事を出しても、採用されなかったとは思うが・・・。